

## 第5回 オウレン

薬学事務課 嘱託技術員 鈴木 達彦

オウレンは多年生草本のキンボウゲ科の植物である。春先、新葉がそろわないうちに花茎を伸ばし、小さな花をつける。花の写真(写真1)を注意して見ていただきたい。白色の花弁とおしべ(雄ずい)に囲まれて、中央にいくつかのめしべ(雌ずい)が春寒を耐えるようにひしめき合っているのがお分かりであろうか。オウレンの花で特徴的なのは、花を咲かせて受粉がすむと、めしべの子房を支えていた子房柄が伸長して、ひしめき合っていた雌ずい1つ1つが別れて袋状の果実、

袋果を作ることである。果実のころ(写真2)をみると、袋果がきれいに車軸状に並んでいる。これら1輪の果実は、もとは1つの



写真1 セリバオウレンの花



写真2 セリバオウレンの果実



写真3 オウレンの根茎  
切断面は黄色。

花が実を結んだものである。袋果の先端には小さな穴があいていて、やがて種子が熟するとこの穴から種子がこぼれ落ちるようになっている。

オウレンは根茎が生薬として利用され、「<sup>おうれん</sup>黄連」と書かれる。根茎は地下部の茎のことで、オウレンの場合年々横に向かって伸長する。節になっている部分が地上部の茎を出していた部分で、根茎の伸長に伴って、一節ずつ連なっていく(写真3)。また、根茎の断面が黄色であるので、これらから「黄連」といわれるわけである。

オウレンの黄色はアルカロイドの1種であるベルベリンの色にもとづく。ベルベリンは強い抗菌活性を有するため、塩化ベルベリン等に製剤化され細菌性下痢の止瀉薬として現代医学でも通用している。一方、オウレンには抗菌作用のほかに清熱、消炎、血圧下降等があることが知られているが、漢方においては、このうち清熱作用、とりわけ心下部(みぞおち)に入った熱をとるのに用いられる。

理解されづらい特徴の1つであるが、漢方では疾病を五臓六腑という臓器を中心に考えたり、気血という体液を中心とした見方をしたり、さまざまな病理論から見る。その中で、病邪が今どの位置にあるか、という病位を重視する見方をとり、表裏、内外といった病位と、病の経過・伝変とを合わせて論じることがある。この見方では心下部は体の中心であり、体表から入ってきた病邪がここまで到達すると重い症状になるため、心下部の熱

に対応できる黄連は重要な生薬となる。漢方においては一口に清熱といっても体表の熱や胸部の熱をとる、といったように病位に応じて論じられることが多く、薬効と病理論とは切り離して考えることができない。